名主（なぬし）鈴木三太夫（すずきさんだゆう）ものがたり

登場人物

ナレーター

三太夫（さんだゆう）

妻（つま）

代官（だいかん）

農民（のうみん）1

農民（のうみん）2

農民（のうみん）3

1

2

3

4

5

6

7

8

（わらべ歌）

「坊さん坊さんどうしたの、草履も下駄もはかないで」
「名主三佐の命乞い、今里陣屋へ気が急ぎ、夢中で走って脱ぎ捨てた」
「それで三佐はどうなった」

これは、海老名の大谷だけに伝わるわらべ歌です。わらべ歌は誰が作ったのか、また、いつの時代から歌われるようになったのか、はっきりしていませんが、この土地のわらべ歌は名主・鈴木三太夫が農民を救った事実を後世に伝えるために作られたものです。

今から約三百年前の江戸時代のお話です。大谷村は幕府直轄の支配地でしたが、ある時は大名や旗本の領地となったこともありました。水田ばかりでなく肥沃な畑にも恵まれ、また、平地林が多く、村人達は平和な暮らしをしていました。

ところが、延宝二年（一六七四年）大谷村は町野壱岐守・幸宣という旗本の領地となってからは、年貢の割り当てが重くなり、その取り立ても厳しく、農民の生活はだんだん苦しくなりました。

その子幸重の代になると、更に領地の農民に対して重い税をかけてきました。

しかし、農民は、税をたくさんとられても、じっとがまんして生活していました。

ある年、天候が悪くお米が少ししか取れない時がありました。

農民1　「米も麦も、去年の半分も取れねえなあー　なんとかならんかのー」

農民2　「年貢を軽くしてもらえねえか頼むしかねえなあー」

農民3　「でも、あの代官様では聞いてもらえねえべー」

農民1　「みんなで名主様にお願いに行くべー」

それでも幸重は、いつもの年と同じように重い税をかけ、取り立てを厳しくしました。その情けのない取り立てのため、農民は疲労が重なり、仕事ができない状態に追い込まれましたが、幸重は、農民の願いに耳をかさないばかりか、逆にもっと重い税をかけたため、農民の生活は、ますます悲惨なものになりました。

その当時、大谷村の名主であった鈴木三太夫は、この農民の苦しむ姿をみて、

代官にお願いしました。

三太夫　「もう何も食べるものがありません。　農民は草の根や木の皮で飢えをしのいでいます。　どうか、年貢の取り立てをまってください」

代　官　「だめだ！　納められない者は牢に入れる」

三太夫　「そんなことをしたら、残された年寄りや子ども達は、生きていかれません。この村は全滅です。」

代　官　「だまれ！　おまえの取り立てが甘いのだ」

三太夫　「来年豊作になったら、必ず年貢を納めます。　約束します。」

と何度も代官にお願いしたのですが、いっこうに聞き入れてくれませんでした。　体力のない老人や子どもは死んでいきました。

農　民　2　「おらのところは、もう何も食べるものがねえ。　みんな飢えて死んでしまうだあー」

農　民　3　「いっそうちこわしでもやっか」

農民1　「いや、江戸に行き幕府に訴えるしかねえべー」

農民2　「そんなことをして、もし見つかったら打ち首になってしまうぞ。」

農民1　「でも誰かがやらねば、村は全滅だ」

農民3　「もう一度、名主様に頼んでみるべー」

と農民達は相談しました。

江戸時代、農民が直接幕府に訴えることは禁じられていました。　農民達がそんなことをしたら大変と、三太夫は自分の罪を覚悟で幕府に強く訴えようと心に決めるのでした。

その晩、三太夫は妻に言いました。

三太夫　「農民達の苦しむ姿をこのまま見てはいられない、幕府にお願いに江戸に行くことにした」

妻　「どうしても行くのですか。　ほかに方法はないのですか」

三太夫　「もう幕府にお願いするしか方法はない」

妻　「いつ行かれるのですか」

三太夫　「明け方出発する。　心配するな。　子ども達のことを頼む」

妻　「ご無事を祈っています」

しかし、代官も三太夫の行動を見張っていて、三太夫が江戸へ行く直前につかまえてしまいました。

代官　「おまえが江戸に行くことは、知っていたわ」

三太夫　「私はどうなってもかまいません。　農民達が苦しんでいます。　どうか、年貢の取り立てをまってください」

代官　「そんなことは知らん！　おまえの罪は、子どもも同罪だ」

三太夫　「子ども達には何の罪もないはずです。　私一人だけを罰してください。お願いします。子ども達は助けてください」

三太夫の処刑を聞き、せめて二人の子どもだけでも助けようと大谷村にある妙常寺の住職が、処刑場へかけつけましたが、

（わらべ歌）

「それでもとうとう間に合わず、二人の息子ともどもに、卯の刻（午前六時）前に打ち首さ」　「それで、そのあとどうしたの」　「妙常寺へ葬った」

同罪として処刑された二人の男の子は、二之助九歳と三之助七歳という幼い子どもでした。

貞享元年（一六八四年）四月二十七日のことでした。

また、三太夫の妻も、夫や子ども達の後を追って自害してしまいました。その後、領主　幸重は、領民を苦しめた罪で領地を没収され家名も断絶しました。そうして、幕府によって年貢も軽くなり、農民達は、元の平和な暮らしができるようになりました。

鈴木三太夫の本名は、三左衛門といい、三太夫という名は、農民達が徳をしのんでつけた名前です。

現在、三太夫の命日である四月二十七日には、毎年、妙常寺で供養がおこなわれ、鈴木三太夫一家が村のために命をささげた事実は、わらべ歌と共に今なお語り伝えられています。